

高島市新指定文化財紹介

描かれた冥土の王たち

平成26年3月25日、高島市教育委員会は、マキノ町海津の寺院に所蔵される「絹本着色地蔵十王図」21幅を、高島市有形文化財として指定することを決定しました。

「絹本着色地蔵十王図」は、冥土（あの世）の裁判官である十王とそれに関係する地獄の場面などを掛け軸21幅に記した仏教絵画で、制作年代は室町時代（16世紀）ころと推定されています。作者は不明ですが、21幅とも目の粗い絹地に丁寧に描かれており、相当の技法を持った専門の絵師によって描かれたものと推測できます。

冥土には10人の王がいて、人は亡くなると7日ごとにこの10人の王の裁きを受けて、その処遇が決定されるといふ十王思想は、中国で生まれたもので、日本では平安時代後期以降、一般の人々の間に広まったと考えられています。ま



たこの思想は、死後の世界の救済者である地蔵菩薩への信仰と結びついて普及し、今回指定された地蔵十王図のように、中の1幅に地蔵菩薩を描き、あの世での救済を願うために作られたものが多いと考えられます。

十王が描かれた10幅には、それぞれ画面上部に各王が大きく表され、その下で亡者がさまざま責め苦を受ける様子が描かれています。また、それ以外の幅には、地獄を始めとする六道の一場面や十



絹本着色地蔵十王図
(21幅のうち1幅)

王信仰と関係の深いテーマやモチーフが描かれ、恐らくは仏教の中で考えられる死後の世界を人々に絵で説明する「絵解き」のために作成されたものだと考えられます。

実際、この地蔵十王図を所蔵する寺院でも、昭和初期までは毎年お盆の時期に本堂に21幅を掛けて、集まってくる檀家や子ども達に「絵解き」をしていたということです。

十王図は江戸時代には各地で多数描かれるようになりますが、ほとんどは10人の王の絵を基本にしたもので、他の場面などを含めて21幅にもなる掛軸が作られ、それが完全な形で保管されているのは大変珍しいことです。今回指定された地蔵十王図は県内の博物館での展示などをきっかけに現状

を確認する調査が行われ、全国的に見ても有数の価値のある仏教絵画であることが認められました。

ただ、掛け軸は、長年「絵解き」に使われてきたことから痛みが激しく、現在所有の寺院では、この地蔵十王図の一般公開は行っていません。今後は、修理・保存方法を検討しながら、この貴重な高島市の文化財を後代へ伝えていく必要があります。

なお、絹本着色地蔵十王図21幅全点の写真パネルは、マキノ町蛭口のマキノ資料館で見いただくことができます。

図文化財課

☎(32) 4467

編集感

表紙は、市制10周年記念として開催されたつつき鯖街道桜まつりのようす。晴天の中、満開の桜をバックに迫力ある吹奏楽の演奏などが行われたほか、屋台が立ち並び多くの方でにぎわいました。私も華やかな桜やおいしい食べ物を堪能。桜はやっぱりいいですね。10周年記念事業としては、このほか4月には映画「じんじん」の上映や、風車村桜まつりが開催されました。5月以降の予定は、7ページに記載していますので、ぜひご覧ください♪ (S)

